

本書は Jesse Prinz, *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion* (Oxford University Press 2004) の全訳である。

本書は、情動／感情に関する研究書である。情動は人の生活で最も重要なものであり、そのため人間が研究対象となりうるほとんどの領域で扱われている。本書は哲学書に分類されるものだが、心理学・認知科学・脳神経科学・文化人類学・生物学といった多分野の知見が包括的に扱われており、さらに、情動の身体性と認知性(第2章と第3章)、基本情動と情動の統一性(第4章)、情動の生得性と文化依存性(第5章と第6章)、感情価(第7章)や感情の分類(第8章)、情動の意識(第9章)、情動とモジュール性・合理性(第10章)など、情動研究の重要なトピックが取り上げられている。そのため、本書を理解するだけで情動研究の動向や知見を一通り知ることができよう。その点で本書は、哲学研究者だけでなく、情動に興味をもった人が初めて手にする情動研究の入門書としても申し分ないものである。たとえば第1章では、さまざまな分野の情動理論が見事に分類されており、そこを読むだけでも、こういったタイプの情動理論にはこんな利点・欠点がある、等々を知ることができるだろう。

初めに訳語の方針を説明しておきたい。日常表現では、怒り・悲しみ・喜びといったエモーション(emotion)を「感情」と呼ぶ方が一般的だろうが、本書はエモーションを「情動」と訳し、「感情」はアフェクト(affect)の訳語とした。この方針は第8章で取り上げられる次の論点を反映させたものである。

アフエクトは、エモーションだけでなく、気分 (mood)、動機づけ (motivation)、心情 (sentiment) などを含む上位のカテゴリであり、そして、こうしたさまざまな心的状態がアフエクトとしてまとめられるのは、それらがすべて正/負の「感情価 (valence)」をもちからである。「感情価」は訳語としてかなり定着しているので、感情価によってまとめられるアフエクトに「感情」を当てる方が適切だと判断した。怒りや悲しみといった情動と憂鬱や気だるさといった気分は負の感情としてまとめられ、喜びや楽しさといった情動と陽気さなどの気分は正の感情としてまとめられるのである。また、感情価はカタカナでポジティブ/ネガティブと訳されることもあるが、本書では正/負と訳した。その理由は、第7章で説明されているように、著者が行動主義心理学の「強化子」と感情価を結びつけているためである。強化子の場合、正の強化子/負の強化子という訳語が定着しているので、それに合わせて感情価も正/負にした。

本書の翻訳方針は以上のようなものだが、エモーションに関する研究書では、エモーションが「感情」と訳されたり、本書が「感じ」と訳したフィーリング (Feeling) が「感情」と訳されたりすることもある。翻訳にあたっては、本書で言及されている論者の既存の邦訳 (エクマン、ダーウィン、ダマシオ、ジェームズ、フランク、ルドゥーなど) を参考にさせていただいたが、前述の方針で訳語を選択したため、そうした論者の著作の邦訳とは訳語が異なっている場合もある。情動研究に関する他の著作を読む際には、どの単語にどの訳語が当てられているか、また、どういった方針で訳語が選択されているかについて注意されたい。

#### 著者について

次に、著者であるジェシー・プリンツを紹介しよう。彼はニューヨーク市立大学大学院センターの特別教授であり、現代の心の哲学、それも「心の自然化」をテーマにした研究を代表する研究者である。心の

自然化を簡単に言えば、自然科学で扱われる世界のなかに心を位置づける試みであり、こうした動向のなかでは、本書のように、心理学や認知科学、脳神経科学、生物学などの知見を積極的に取り入れた議論が行われている。むしろ最近では、そうした科学的知見を無視した心の哲学研究はもはや不可能であると言えるような局面を迎えつつあるかもしれない。本書をはじめとして、彼の著作はどれも心に関する非常に多くの分野の知識が用いられており、その意味で彼は、現在の心の哲学のお手本となる研究者だと言えるだろう。とくに彼は伝統的なイギリス経験論の見解を現代の認知科学を使って復活させるということに研究人生を捧げており、その方針を「認知経験論」と呼んでいる。人がもつさまざまな心的状態の基礎に知覚などの経験を据える経験論を現代の認知科学によって強化させるという研究方法は、情動を文字通り知覚の一種とみなすジェームズ・ランゲ説を認知科学によって復活させることを試みた本書でも十分に見て取ることができる。

また、彼はこれまでに数多くの論文や著作、編著を發表しており、現在でもコンスタントに成果を發表し続けている。二〇一六年現在、単著としては以下のものがある。

*Furnishing the Mind: Concepts and Their Perceptual Basis*, Cambridge, MA: MIT Press 2002.

*Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*, New York: Oxford University Press 2004. (本書)

*The Emotional Construction of Morals*, Oxford: Oxford University Press 2007.

*Beyond Human Nature*, London: Penguin / New York: Norton 2012.

*The Conscious Brain*, New York: Oxford University Press 2012.

最初の著作 *Furnishing the Mind* では知覚と概念が扱われており、その成果を応用して情動に取り組んだ

のが本書である。その次の著作 *The Emotional Construction of Morals* では、本書の情動研究を下敷きとした道徳の情動主義が展開されている。概念・情動・道徳を扱った最初の三つの著作は、デイヴィッド・ヒュームの『人間本性論』の三つの篇（知性・情念・道徳）対応する三部作だという。

さらにここ数年の彼は、本書で提示された情動理論を応用した美／感性 (aesthetic) についての情動主義に力を入れている。彼自身はハードコアパンクやノイズミュージックが好きらしく、「パンクロックの美学」という論文も執筆している (“The Aesthetics of Punk Rock”, *Philosophy Compass* Vol. 9 Issue 9, 2014)。

その論文の要旨は「哲学者はパンクロックを聴くべきである」という非常にセンセーショナルな文から始まっており、本文では初期パンクに関するかなりマニアックな知識が披露されている。ネットで彼の画像検索をすると、緑、青、赤、など、さまざまな髪の色をしている写真が見られるだろう。ちなみに、二〇一六年の四月にプリンツ氏が来日したときの髪はピンク色だった。

#### 本書について

では、本書の解説に取り掛かろう。原著のタイトル *Gut Reactions* を直訳すると「内臓の反応」になる。ガット (gut) といえは、テニスラケットの網や楽器の弦を思い浮かべる人もいるかもしれないが、それらもともと羊などの腸から作られていた。また、焼肉屋で「ガツ」を注文すると胃腸などの消化器官が出てくる。このようにガットはまずもって内臓を意味しているのだが、思考などの知性的な働きとの対比で、直感や本能、そして、情動／感情という意味をもっている。

本書で提示される情動理論は、ガットと情動の結びつきを文字通りに受け取り、情動は内臓をはじめとする種々の身体反応の知覚であると主張するものである。たとえば、危険にさらされるときは恐怖を感じ、好ましいことが起きたときには喜びを感じるが、そうした情動は、主体が置かれた状況を主体に伝

える手段の一つ、それも、冷静な思考や判断といった高度な認知ではなく、身体反応を使って状況を主体に伝える手段だというのである。(ちなみに邦題の『はらわたが煮えくり返る』だと内臓反応が怒りに限定されてしまうが、内臓を生かした日本語の慣用句では最もインパクトがあると思われ、また、プリンツ氏にも了承いただいたので、この邦題にした。)

本文でも述べられている通り、身体反応を強調する理論が情動研究で主流派になったことはない。だからこそ、あえて情動の身体性を強調する本書では、他の著作にはない興味深い主張や、それを裏づけるための慎重な議論をみることができるといえる。以下では、本書のなかでもとくに重要な、プリンツ自身が提示している二つの理論を概説しよう。

### 身体性評価説

本書の一番の目玉は、もちろん、プリンツ自身の情動理論、「身体性評価説 (embodied appraisal theory)」である。

身体性評価説の源流は、「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」というフレーズが有名なジェームズ・ランゲ説にある。常識的には、悲しいという心的状態がまず生じ、それが涙や体の震えといった身体状態を引き起こすと考えられるだろうが、ジェームズとランゲは、涙を流すことや体が震えるといった身体状態がまずあり、その身体状態を知覚する状態が悲しみだと主張したのである。この立場は次のような思考実験から支持されると言われている。まず、何らかの情動を想像してみよう。たとえば、悲しみを感ずる場面を考えてみよう。次に、その場面から、悲しみに伴っている身体反応をすべて取り去る想像をしてみよう。涙も流さず、顔も強張らず、体が脱力することもなく、喉が詰まったりすることもない。では、この状態は悲しみだと言えるだろうか。こうした身体状態なしの悲しみというのは想像し難

いように思われる。この点からジェームズとランゲは、情動から身体状態を取り除くと後には何も残らないと考えた。情動は、身体状態が意識的に知覚されたものと主張しているのである。

ジェームズとランゲ説は、情動に関する本や講義ではかなり最初の方に取り上げられる立場である。だが、取り上げられた途端に、本書にも出てくるウォルター・キャノンの批判 (Canon 1927) の餌食になってしまう。その批判とは、身体状態ではそれぞれの情動を、そして、情動と情動でないものを区別できないというものだ。たとえば、恐怖でも激怒でも発熱でも、鼓動が早くなったり筋肉が緊張したりするといった身体状態が伴っているだろうが、前者二つは異なる情動であり、発熱は情動ではない。情動の身体性を強調する立場には、これらを区別する手段がないと考えられているのである。

こうした批判は、身体状態をより細かく特徴づければ回避できるかもしれない。ジェームズとランゲは身体状態ということで内臓や血管の状態、表情、行動などを考えているが、プリンツと同じくジェームズとランゲ説の復活を試みている神経科学者のダマシオは、ジェームズとランゲ、キャノンが考えていなかった、脳状態やホルモンレベルの変化といったものも身体状態に組み込んでいる。身体状態を計測する手法、装置が発展すれば、それに応じて、情動ごとに異なった身体状態があるということが発見されるかもしれない。さらにダマシオは、情動が生じるために、特定の身体反応が生じる必要はないとも主張している。ダマシオによると、通常は身体状態を記録している脳領域は、実際に身体状態が生じなくとも生じているときと同じ状態になりうる。脳は、特定の身体変化があたかも生じたかのように活動しうるといふのだ。そしてダマシオは、その脳領域が活動すれば、たとえ身体状態の変化が実際になくとも、情動が生じていると十分みなせると主張している。この考えが正しければ、かりに脳以外の身体状態が同じであっても、脳状態が異なれば、異なる情動をもっていると主張できるだろう。

だが、情動の身体説にはさらに深刻な問題がある。それを理解するために、まず、情動の対象とは何か

を考えてみよう。情動は二つの意味で対象をもつと言える。たとえば、牙をむき出しにしてうなり声をあげている犬を見て恐怖を感じるとしよう。その犬は、そのときの恐怖を生み出した原因となつた具体的な対象、本文中の用語で言えば、「個別的对象」である。だが、情動の対象はこれだけではない。というのも、恐怖を引き起こすのは犬だけではないからだ。近づいてくる毒ヘビやクマ、目の前の断崖絶壁も恐怖を引き起こすだろう。犬と毒ヘビと断崖絶壁は異なる個別的对象だが、ある意味では、どれも恐怖の対象である。そして、それに対応するように、これらの異なる個別的对象に共通する性質がある。それは、どれも身の危険をもたらすということである。この〈身の危険をもたらす〉という性質が情動のもう一つの対象、「形式的対象」である。心理学者のラザルスの用語を使えば、「中心的関係テーマ」だ。さらに注目すべきなのは、〈身の危険をもたらす〉という性質には、主体と個別的对象との関係が含まれていることである。たとえば、小さい子供は小型犬が吠えているのを見て怖がるかもしれないが、その犬を簡単にあしらえるくらいの大人は怖がらないだろう。小さい子供には小型犬も脅威をもたらしうるが、大人にはそうではないからだ。こうした点で情動の形式的対象である中心的関係テーマは、個別的对象が主体の福利(よきあり方 well-being) にどのような影響を与えるか、という価値的要素を含んでいるのである。この点はすべての情動にあてはまる。悲しみは、友人の死でも自分が買っていた株の大暴落でも、何であれ自分が大切にしていたものの喪失に向けられている。同様に、怒りは自分に対する侵害に、喜びは自分の目標との一致に向けられているだろう。

情動の身体説の問題は、身体反応は中心的関係テーマに向けられるのか、ということである。身体説によれば、情動とは筋肉の緊張などの身体状態を知覚する状態である。だが、身体状態を知覚してわかるのは、せいぜい、その身体状態だけではないだろうか。筋肉の緊張を感じてわかるのは筋肉が緊張しているということであって、自分の身に危険が迫っていることの把握には到底いたらないように思われる。そ

のため身体説では、情動にとつて重要な中心的関係テーマと情動との関係が説明できないと考えられるのである。

むしろ、中心的関係テーマを捉えるためには、思考や判断といった認知的状態が必要とされると考えられるかもしれない。思考や判断は明らかに「危険が迫っている」といった価値を捉えることが可能な心的状態である。また、「危険が迫っている」という思考は「侵害されている」という思考とは異なる内容をもっている。そのため、「こうした認知的内容を使えば、異なる情動（ここでは、恐怖と怒り）を区別できるだろう。また、発熱にはそうした評価的な認知的内容は関わらないと言うことで、情動と情動でないものを区別することもできる。こうした点から、哲学でも心理学でも、情動には判断のような評価的な認知的状態が含まれると考えられることが多い。確かに、われわれが情動をもつときには、鼓動が早くなったり筋肉が緊張したりするといった身体変化が生じているが、情動にとつて重要なのはこうした認知的状態だと考えられるのである。

プリンツは認知説に反対する議論も行っているが（第2章）、ここでは、身体説が答えられないとされる問題、つまり、身体状態はどのようにして中心的関係テーマを捉えられるか、という問題をプリンツがどのように乗り越えるかに焦点を合わせたい。この問題を解決するためにプリンツが用いるのが、ドレツキの表象理論、そして、情動の名目的内容／実質的内容の区別である（第3章）。ここではとくに、プリンツ独自の主張である後者の情動の二つの内容について概説しておこう。ドレツキの理論については、本書第3章、さらに詳しくは、フレッド・ドレツキ『心を自然化する』（鈴木貴之訳、勁草書房、二〇〇七年）を参照されたい。

名目的内容と実質的内容の違いを理解するために、一旦情動から離れて、目の前にいる生き物が犬であると認識する場合について考えてみよう。ある生き物が犬であることにとつて本質的なのは、特定のゲノ

ムをもっているとか、特定の系統樹に位置づけられるといったことだろう。ゲノムや系統樹は感覚器官を通じて知ることができるようなものではない。だが、ゲノムや系統樹にとって何の知識がなくとも、人はおおよそ犬を認識できる（さらには、ゲノムや系統樹といった概念が発明される前の時代の人も犬を認識できていただろう）。それは、犬ゲノムという本質的特徴と、いかにも犬っぽいとされる観察可能な特徴のあいだに、信頼できる因果関係が成り立っているからである。犬ゲノムをもっている生き物は、おおよそ、毛が生えており、四足歩行で、よく舌を出したり吠えたりする、といった観察可能な特徴をもっている。また、犬ゲノムをもたないものは、通常こうした特徴の組み合わせもたないだろう。犬ゲノムは、これらの観察可能な特徴をもたらずような影響力をもっているのである。こうした因果関係が成り立っている場合、われわれは、対象がもつ観察可能な特徴を捉えることを介して、その対象が犬であることを認識することができる。犬ゲノムそのものは観察不可能でも、毛が生えているなどの観察可能な表面的特徴を介して、対象の犬性を捉えることができるのだ。この場合、犬ゲノムなどの犬にとって本質的特徴が、犬を認識する状態の実質的内容であり、観察可能な表面的特徴が名目的内容である。

この区別を念頭に置き、情動を考えてみよう。プリンツによれば、情動の実質的内容は中心的関係テーマであり、名目的内容が身体状態である。向かってくるクマを見たとき、鼓動の早まり、筋肉の緊張、脳状態やホルモンレベルの変化といったさまざまな身体状態が生じる。それらは情動の名目的内容となっており、そうした名目的内容があることによって、〈身の危険をもたらす〉という中心的関係テーマが捉えられるのである。また、情動の実質的内容である中心的関係テーマと、特定の身体状態という名目的内容のあいだには、前者が後者を生じさせるという因果的な影響がある。人間は、自分の福利に関わる重要な状況の直面したときに特定の身体状態になるような仕組みを進化的に獲得したと考えられるのだ。この考えによれば、情動とは、思考や判断といった高度な認知とは別の手段で、つまり、身体状態を介し

て中心的関係テーマを捉える心的状態だということになる。

身体性評価説の最大のポイントは、真っ向から対立すると考えられてきた情動の身体説と認知説を調停させることにある。片方は情動における身体反応の重要性が強調され、もう片方では情動と中心的関係テーマとの関係が強調されていた。身体性評価説は、中心的関係テーマを捉える評価の状態は身体状態を利用していると主張する、いいとこどりの理論なのだ。情動は、高度な認知なしに、主体が置かれた状況に評価を下す心的状態だというのである。

### 意識のA I R説

本書で展開されているもう一つのプリント独自の理論は、意識のA I R説である。

プリントは、無意識的な情動が存在するという主張を擁護している(第9章)。身体性評価説によれば、情動は中心的関係テーマを捉える身体状態の知覚であり、文字通り知覚の一種である。一方で、視覚などの典型的な知覚には無意識的な知覚状態があると考えられている。そうであるなら、身体状態の知覚、つまり、情動にも無意識的なものがあると考えておかしくない。情動が果たしている第一の役割は中心的関係テーマを捉えることだが、一見したところ、それは意識的にしか捉えられないと主張する必要はなさそうだ。実際に、無意識の情動を示唆する実験はいくつかある。たとえば、悲しい顔の写真をサブリミナルに呈示された被験者は、自分の情動や気分が変わったとは思わないが、その後でアップビートな音楽を選択する傾向にある(Strahan, Spencer, & Zanna 2002)。この傾向は、被験者が気づかない(無意識の)悲しみが誘発されており、それが選択を促している、と説明されるだろう。

だが、無意識の情動を認めたとしても、依然として意識的な情動が存在することは確かである。頭に血のぼる感じをとまなう怒りや、天にもぼるように感じる喜びがあることは否定できない。そうすると、

次の二つの問題が浮かび上がってくるだろう。一つめは、無意識的にも成り立ちうる情動は、どのようにして意識的に経験されるようになるか、というものである。二つめは、無意識的にも可能な情動状態がわざわざ意識的になる理由は何か、というものだ。

この問題に答えるためにプリンツが提示するのが意識のAIR説である。AIR説は、視覚的意識に関するレイ・ジャッケンドフの洞察 (Jackendoff 1987) をもとに作られたものであり、本書では文字通り知覚の一種とみなされた情動にこの理論が応用されている。(実際のところプリンツは、意識経験はすべて知覚的なものであると考えているので、意識はすべてAIR説によって説明されるものだということになる。)

視覚システムは、低レベル、中間レベル、高レベルの三つに分けられることが知られている。一次視覚野 (V1) が関わる低レベルでは局所的な特徴 (短い線分や色の断片) が捉えられる。こうした局所の特徴を統合して対象の輪郭や色などを捉えるのが、外線条皮質 (V2-V5) に関わる中間レベルである。そして、下側頭皮質 (TE, TEO) と関連した高レベルでは、視点に依存しない認識ができあがる。つまり、同じ対象がさまざまな方向から、異なる距離で知覚されても、同一の対象だという認識が成立するのだ。そしてジャッケンドフによれば、これらのうち中間レベルが意識に対応している。低レベルはばらばらすぎ、高レベルは抽象的すぎるが、中間レベルはわれわれが視覚的に経験している世界のあり方に最も合っていると考えられるのである。

だが、ジャッケンドフの提案には足りない部分がある。たとえば、ある種の盲 (半側空間無視) を患った患者には、呈示された対象についての意識経験を欠いているにもかかわらず、その対象を認識しているようにみえる場合がある (Bisach 1992)。対象の認識は高レベルで成立するため、それより前の過程である中間レベルでも視覚的処理が行われているはずである。そうすると、中間レベルの処理が行われているだけでは意識経験は成立しないということになる。その処理を意識的にする何かがあるはずなのだ。

プリントによれば、中間レベルを意識的にするのは注意である。前述の盲患者が損傷していたのは、まさに、注意と関連する領域だった。また、健常者に「不注意盲」と呼ばれる現象を引き起こす実験でも、注意を向けられていない対象は意識的に経験されないことが示唆されている (Mack and Rock 1998)。このように、意識を「注意を向けられた中間レベル表象 (Attended Intermediate-level Representations)」として主張するのが意識の A I R 説である。

注意にもいろいろな定義があるが、プリントが用いている注意は、「脳における情報の流れを調整する過程」というものである。知覚的注意における情報の流れは、中間レベルから高レベル、そして高レベルからワーキングメモリへとつながるものである。さらに、ワーキングメモリをもち出すことで、意識は何のために生じるのかも説明できるようになる。ワーキングメモリでは推論や問題解決、いわゆる「熟慮」が行なわれている。熟慮は、事前に準備されたり反射的なものではない反応、言い換えると、環境や文脈に合わせた臨機応変な反応を決定する過程である。そして、中間レベルはこうした熟慮のためにふさわしい情報を与えている。まず、低レベルの情報は断片的すぎて熟慮に使えない。他方で、高レベルの情報は熟慮に利用可能ではあるものの、不十分であると考えられる。というのも、高レベルでは視点依存的な情報が捨象されているからだ。高レベルの情報は何らかの対象があることを認識させるが(たとえば、「クマがいる」など)、その対象がどこにあるのかについての情報が落とされている。そのため、その対象に対する反応を決める(どこに逃げるかを決める)うえでは高レベルの情報は抽象的すぎるのである。むしろ、熟慮の過程で最も利用価値があるのは、視点依存的な情報を含んだ中間レベルの情報なのである。以上のことからすると、意識は、熟慮に必要な視点依存的な情報をワーキングメモリに利用可能にするためにある、ということになるだろう。

視覚についての A I R 説は以上である。次に、これを情動(身体状態の知覚)に応用しよう。A I R 説

にしたがうなら、まず、情動にも三つのレベルがあると考えられるだろう。プリンツは以下のような階層を提案している。まず低レベルには一次体性感覚皮質(SI)と橋(pons)が関わり、ここでは身体の局所的变化(内臓・骨格筋・ホルモンレベルなどの変化)を捉えられている。中間レベルには島皮質(isula)、二次体性感覚皮質(SII)、背側前帯状皮質(DACC)が関わり、ここでは局所的变化が統合され、身体パターンができあがる。そして高レベルには吻側前帯状皮質(VACC)あるいは前頭前皮質腹内側部(VMPFC)が関わるという予測が立てられており、ここでは、中間レベルで探知された複数のパターンの差異が捨象され、情動の認識が成立すると考えられている。たとえば、恐怖によって硬直する場合と恐怖から逃避する場合では異なる身体パターンが関わっているが、高レベルではどちらも恐怖としてまとめられるのだ。

AIR説が正しければ、情動的意識にも注意が必要とされるはずである。それを示唆する実験は挙げられていないが、プリンツによると、注意の必要性は日常的な経験から十分納得できるものである。たとえば飛行機恐怖症の人が飛行機に乗っていても、隣にいる友人が話した面白い話に夢中になっているあいだは、恐怖は感じられないだろう(だが、身体は依然として硬直したままであり、無意識の恐怖はあっているとされている)。また、計算などの作業に夢中になっているあいだは、怒りや悲しみといった情動を感じなくなるかもしれない。注意が身体パターンから別のものに向けられると、情動は無意識的なものになり、感じられなくなるのだ。

さらに、情動が意識的になることにはどのような意味があるのかも、視覚の場合と同様に説明される。情動の低レベルが捉えているのは局所的な身体変化であり、熟慮の役には立たない。他方で高レベルでは、さまざまな身体パターンの差異が捨象されている。たとえば、硬直反応と逃走反応の違いがなくなり、単に恐怖と認識されるのである。そして、この認識はさらなる反応を決定するうえで抽象的すぎる。たとえば、体が硬直しているならじっとしている方が好ましく、逃げ出す準備ができていなら逃げ出した方

が得策かもしれないが、高レベルの認識ではどちらの反応を取った方がよいかを決めるための身体パターンの情報が捨象されているのである。ここでも、熟慮のうえさらなる反応を決定するためにふさわしい情報を与えるのは中間レベルなのである。情動が意識的になることには、熟慮に必要な情報を利用可能にするという意義があるのだ。

あとがき

「心」と聞いてまっさきに思い浮かぶのは、喜び、悲しみ、怒りといった情動のことではないだろうか。少なくとも、かなり早い段階で連想されるものだろう。だが、心について興味をもった人が「心の哲学」と銘打った本や講義に触れてみて目にするのは、心身問題、意識（クオリア）、志向性、といったもので、情動については何も触れられないまま終わってしまうことも少なくない。確かにこうしたトピックは心の哲学の王道であり、心という領域を追求して行つて最終的に直面するような根本的な問題である。だが、それに負けず劣らず、情動も哲学的考察の対象としてかなり興味深いものである。解説の冒頭でも述べた通り、情動は人間の生活の中心にあり、さまざま領域で研究されている。そのため、さまざまな分野の知見を利用した包括的な考察が可能であり、また、情動についての哲学的考察は関連する分野の研究に影響を与える可能性がある（実際にプリントは、自身の情動理論を倫理学や美学に応用している）。そうした意味で、情動は哲学のなかでもっと注目されてもいいテーマである。

とはいえ、最近では国内でも情動の哲学が盛り上がる兆しを見せており、次のような著作が刊行されている。

信原幸弘・太田絃史編著『シリーズ新・心の哲学Ⅲ情動篇』勁草書房、二〇一四年。

戸田山和久『恐怖の哲学——ホラーで人間を読む』NHK出版新書、二〇一六年。

前者に収録されている服部裕幸「情動の本性」では本書の原著が取り上げられており、他の論文では、合理性、自己制御、自己欺瞞といったものと情動／感情に関わる話題が扱われている。後者は、プリンツの身体性評価説をフィクションの哲学や美学（なかでもホラー映画の鑑賞）に応用したものである。本書を読んで情動に関してさらに掘り下げたいと思った読者は、まずこの二つを読んでみるのがいいだろう。

最後に謝辞を述べたい。この仕事は、ウィリアム・フィツシュの『知覚の哲学入門』を共同で翻訳した際に監訳をしていた山田圭一さんが勁草書房に推薦してくださったことで実現した。前回と今回の翻訳、また、知覚の哲学に関連する企画について、山田さんには感謝してもしきれないほどお世話になっている。次に、『はらわたが煮えくりかえる』という邦題をご提案いただいた植村玄輝さんに感謝したい。当初は副題の『情動の身体知覚説』を主題にしようと思っていたが、そんなつまらないタイトルはダメだと言つてこの邦題を考えてくださった。また、慶應大学で心の哲学勉強会を開催していたときに訳稿の一部をチェックしていただいた、伊藤均、土屋一幾、永野景瑚の各氏にも感謝したい。また、帯文を書いてくださった戸田山和久先生にも感謝する。最後に、本書の翻訳を提案いただき、編集を担当していただいた渡邊光さんに感謝したい。